

日本新聞製作技術懇話会
広報委員会編集

編集人 辻 裕史
東京都千代田区内幸町
日本プレスセンタービル
8階 (〒100-0011)
電話 (03) 3503-3829
FAX (03) 3503-3828
<http://www.conpt.jp>

CONPT

CONFERENCE FOR NEWSPAPER
PRODUCTION TECHNIQUE JAPAN

VOL.35 No.6
2011.12.1
会報 (通巻 210 号)

日本新聞製作技術懇話会
会報 (隔月刊)
(禁転載)



目次

CONPT TOUR2011の足跡	3
朝日新聞社 製作本部生産管理セクション技師 梶原 浩史	4
朝日新聞社 製作本部システムセクションコントローラー 唐澤 和義	4
産経新聞大阪本社 制作局長 上坂 徹	5
(株)日経首都圏印刷 執行役員業務統括部長 正津有一郎	6
(株)日経東京製作センター 東雲工場次長兼印刷部長 齊藤 哲夫	7
日本新聞協会 技術コンサルタント 三宅 順	8
(株)インテック NSG事業部メディアソリューションセンターメディアソリューション営業部長 林 克美	9
サカタインクス(株) 新聞事業部東京営業部マネージャー 望月 剛	10
第一工業(株) 搬送システム本店営業部主任 中島 悠希	11
DICグラフィックス(株) 新聞インキ事業部東京新聞第二営業部東京第二担当課長 関 千秋	14
東洋インキ(株) 新聞販売統括部販売部第一課課長 藤井 公一	14
富士通(株) 社会基盤システム本部メディアシステム事業部 平泉 新	15
富士フイルムグラフィックシステムズ(株) 新聞営業部部長 松浦国治郎	16
富士薬品工業(株) 営業第三部部長 瀧口 英司	17
三菱重工印刷紙工機械(株) 営業本部営業統括部新聞輪転機営業グループ九州担当課長 島村 昌志	18
写真に見るツアー点描	12
新局長に就任して 静岡新聞社 印刷局長 増田 晴樹	19
TKS かずさテクノセンター 視察記 (有)メディアテクノス 代表取締役 井上 秋男	20
IGAS2011 見学記 グラフィックアーツテクニカルコンサルタント 尾崎 章	22
楽事万歳 (株)ニコン 映像カンパニーマーケティング本部第三マーケティング部 CS 課 伊東 浩	25
会員社リポート 明和ゴム工業(株)、DICグラフィックス(株)	26
日本アイ・ビー・エム(株)、東和電気工業(株)	27
第109回技術懇談会記	28
京都で新聞大会開く	28
会員消息他	28

- 表紙写真提供：CONPT TOUR 2011入選作より
朝日新聞社 梶原 浩史氏「トリノのメデューサ」
- 表紙製版：(株)ディリースポーツプレスセンター
- 組版・印刷：(株)ディリースポーツプレスセンター

CONPT TOUR2011の足跡

今年のCONPT-TOURは10月16日、8日間の日程を無事こなし帰国しました。昨年のハンプルク、ベルリン7日間より1日だけ延長し“タイト感”の緩和を目指しましたが、参加の皆さんの多くは強行日程と感じたようです。逆にいえば一生懸命見学しかつ勉強した証しとして、胸を張って帰任できたことでしょう。

IFRA展の開かれるウィーンに向け出発したのは、10月9日の日曜日午前。約12時間のフライトで夕刻のウィーン空港に到着し、オーストリア、イタリアツアーが始まりました。ウィーンのメッセ会場でのIFRA展は、昨年より活気が乏しく入場者は昨年1万人の台を回復したのも束の間、今年は8千人に落ち込んだということです。理由の一つとして来年は4年に一度のDrupa展が開催されるため、出展社は新技術・新機器の公開を控えたところにあるようです。

IFRAのCONPT-TOURに対する歓迎ぶりは変わらず、早速例年通りセミナーを開いてくれました。今年のキーワードはコスト削減、自動化、ニュービジネスモデルということです。まとめていえば、工程を見直し製作コストをできるだけセーブしながら、有料サービス(電子媒体など)に力を注いで収入増を図ろうというのですが、しばらくは紙媒体が“米

櫃”であることに変わりはないということでしょうか。

午後からは会場を見学しましたが、上流の制作ソフト・CMSが目立ったといえます。下流では実機などは少なく、ことに大型のものは目に付きませんでした。

翌日から新聞社、印刷工場見学シリーズが始まりました。ウィーンのHerold Druck社工場は大規模な印刷工場では版替えロボットを見ました。装着時間がかかりすぎるとはツアー参加の専門家の意見。イタリアではトリノの有力紙La Stampa紙の上流・下流、ミラノの経済紙IL Sole 24 ore、ヴェローナのArena社工場を見学しました。少人数で輪転機を回していることやカラー技術など見るべきものもありましたが、おしなべて日本の先進性・効率性が優れているとの評価でした。

今回の“同窓会”のネーミングは、ミラノの宿泊ホテル「ミケランジェロ」をそのままいただきました。団長の松浦国治郎氏、副団長と現地研修会の講師を務められた林克美氏、津田鉄也氏、もう一人の講師平泉新氏、ホテル自室で“スナック”を開いてくれた松浦氏、関千秋氏、望月剛氏、藤井公一氏、島村昌志氏の皆さんには改めてお礼を申し上げます。

(事務局)

CONPT TOUR 2011 日程

月 日	地 名	訪問先
10月 9日(日)	東京(成田)発 ウィーン着	
10月10日(月)	ウィーン	IFRAセミナー、IFRA展視察
10月11日(火)	ウィーン	Herold Druck社印刷工場
10月12日(水)	ウィーン発 ミラノ着	La Stampa紙
10月13日(木)	ミラノ	Il Sole 24 Ore社、Arene印刷工場
10月14日(金)	ミラノ	研修会、さよならパーティー
10月15日(土)	ミラノ発 ウィーン経由	
10月16日(日)	東京(成田)着	到着後流れ解散

夢のカケラから夢を紡ぐ

朝日新聞社

製作本部生産管理セクション技師

梶原 浩史

「夢のある話を持ち帰れたら…」という気持ちで臨んだCONPTツアー。視察を終えて、商品としての情報の流通ラインは少しずつ紙からデジタルにシフトしていかざるを得ないことを実感し、その分野を開拓していくことには夢がありそうだったと思った。しかし下流部門出身者としては、プリントメディアの明るい未来が見えないことに忤怩たる思いが残った(悲壮なダイエットの覚悟なら見えたが…)。とは言え全くの無ということではなく、バラバラになったパズルのピースのような夢のカケラは、頭に残っていると思う。それをつなげていくことを、これからの宿題とした。

24時間稼働のHerold Druck社は、下流再興のモデルケースに見えたが、日本では現在のコストでそこまでできる仕事がないのが実態だと思う。朝刊帯だけ稼働するArena社の方が日本に近かったが、残念ながら、そこに新しいものは見えなかった。

ヨーロッパの新聞業界自体、日本とだいぶ考え方が違うことも新鮮だった。日本では枝が集まって木になるような感じだが、ヨーロッパでは最初に幹があって枝が生えて木ができる、といった合理性を感じた。一言で言うと、「何事もシンプル」。トップダウン文化の欧米と、ボトムアップ文化の日本の違いだろうか。

各印刷現場では、クワイエットルームで優雅にオペレーションしているのが印象的だった。しかし、人間力が感じられる日本の現場も、負けず劣らず美しいと思う。新聞業界の厳しさが伝えられる昨今だが、世界の動向を持ち帰り、現場で知恵を絞っていくことが、次のステージへの一歩になると信じたい。



ARENA社のテスト印刷の風景

仕事の部分をさて置くと、このツアーは本当に楽しかった。タイトなスケジュールだったが、天気にも恵まれ、見学の合間に感じるヨーロッパの風が心地よかった。

何より、ツアーメンバーの皆様の明るさが良かった。FFGSの松浦団長を初めとして、盛り上げ役を買って出ていただいた皆様に感謝。また、通訳をしていただいた事務局の木村さん、インテックの林さん、お二方がいらっしやなければ無力でした。改めて御礼申し上げます。そして電源プラグを忘れるという大ボカをやらかした私に快く予備を貸して頂いた富士薬品の瀧口さんに大感謝です。

なお「新聞技術」誌にツアーの下流系報告を寄稿させていただきましたが、取りまとめにあたり、ツアーの皆様のご意見やツアーのしており、研修会の資料など、大いに参考とさせていただきます。この場を借りて御礼申し上げます。多少、間違いもあるかもしれませんが、ご笑覧いただければ幸いです。

読者目線の大切さを再認識

朝日新聞社

製作本部システムセクションコントローラー

唐澤 和義

「CONPT-TOUR 2011」への参加が正式決定した日のこと。仕事を終えて満員電車で揺られながら、車内を見渡してみた。向かいの席の学生さんはスマートフォンの画面を食い

入るように見つめ、隣の席のOLさんはスマートフォンを指先で軽快に操作している。日本でのスマートフォン市場の拡大は明らかだ。「世界的に新聞の発行部数が減少する中、新聞社がスマートフォンやタブレットで成功を収める秘訣は何か？」このツアーでの視察ポイントが、この瞬間に決定した。

◇ ◇ ◇

今年のIFRA-Expoはオーストリア・ウィーンでの開催。ウィーンと言え、芸術と文化の国。市立公園、シェーンブルン宮殿、美術史美術館、オペラ座など、観光名所は枚挙にいとまがない。しかし、当方には、芸術と文化はどうにも肌が合わない。市立公園ではJ・シュトラウス像やシューベルト像を見ても特別な感慨はなし。シェーンブルン宮殿では「もっと世界史を勉強しておけばよかった」と後悔する始末…。唯一、オーストリアを心から堪能できたのは「ヴィーナー・シュニッツェル」を完食した瞬間だ。皆様が完食できずに食べ残す中、正直、もう1枚は食べられた。「レモンの皮まで食べちゃった」疑惑が持ち上がったが、写真を見る限り、最初からレモンが付いていなかったようだ。

2カ国目は待ちに待ったイタリア！ セリエAにティフォシ、ジローラモ？、何度食べても食べ飽きないイタリアン！ これまで1回も訪れたことがないのに「欧州で最も自分に合っている国」と勝手に思い込んできたイ



余裕で？完食した「ヴィーナー・シュニッツェル」

タリア。実際に足を踏み入れた瞬間、それは「確信」に変わった！（松坂大輔投手？）

ウィーンと比べれば、空気は悪いし、運転マナーも悪い。治安も悪そうだ。しかし、イタリアの雰囲気が好きでたまらない。視察メンバーから「現地にとけ込んでいる」と言われた時は、心底うれしかった。決してジプシーに見えた訳ではないと思うが…。

◇ ◇ ◇

今回のツアーの視察ポイントだった「成功を収める秘訣」は見つかったのか？ 欧州の新聞製作事情は、言葉でそれに答えてくれることはなかったが、内なる「何か」を与えてくれた気がする。新聞のコンテンツをそのまま多チャンネルに配信することがクロスメディア対応ではなく、読者ニーズを分析し、ニーズに応じたコンテンツを読者目線で配信することの大切さ。デジタルでは新聞以上に「読者目線」を意識しなければ、成功はあり得ない。進むべき方向性は見えたと思う。

最後に、今回のツアーでご一緒させて頂いた皆様、いろいろお世話になりました。気さくな方ばかりで、本当に楽しいツアーでした。この場を借りて、お礼申し上げます。

古都にたなびく紫煙

産経新聞大阪本社 制作局長

上坂 徹

華麗な宮廷文化が花開いた古都・ウィーン、ハプスブルグ王朝の歴代皇帝が夏の離宮としていたシェーンブルン宮殿は、豪壮なバロック様式の建物を、女帝マリアテレジアが好んだイエローが彩る。背後に広がる王宮庭園は幾何学模様をレイアウトし、宮殿と共に世界遺産に指定される。そこで場違いとも思われる光景を目にした。くわえタバコの市民。吸い終わると、何の抵抗もなく、さっと投げ捨て、靴で踏みつぶす。そんな様子はウィーンの街角でもよく見かけた。

実はツアーへの参加が決まって、まず頭に浮かんだのは、愛煙家の私には厳しいことになるだろう、ということだった。海外経験は多少あるつもりだが、これまで取材で訪れたのはアジア各国や、アメリカ、オーストラリア。ヨーロッパは初めてで、飛行機内はもちろん、空港、ホテル、町の中まで、喫煙場所を探すだけで、疲労困憊するのでは、と思っていた。が、そんなことは杞憂だった。訪れたオーストリア・ウィーン、イタリアのミラノ、トリノ、ヴェローナでは、ホテルの部屋はもちろん、道路でも、公園でも喫煙は問題ない。宮殿の係員に「タバコはどこで吸えるのか」と聞くと、外側に向けた指をぐるりと回し、「特に、どこでも」。

ただ、今回のツアーは、そんな王宮文化をゆっくり味わう暇などなかった。スケジュール表には視察予定がぎっしりと詰まっており、数年前にツアー参加経験のある先輩から聞いた内容とは、とんでもない隔たりがあった。

ウィーンで開かれたIFRA EXOP。会場には世界のメーカーが上流、下流の最新機器を展示していた。目に付いたブースでは立ち止まって話を聞くのだが、少なくとも下流では、これといって目立つものはなかった。個人的にはデジタル印刷機の最新動向に興味を持っていたのだが、来年のDRUPA 2012（国際総合印刷機材展）に注力するためなのか、今回はおとなしい展示に終始し、その点では残念だった。

我々ツアー一行のために用意されたセミナーで、世界の新聞印刷・製作の傾向について、講義を受けたが、コスト削減▽自動化▽最新ビジネスモデルの三点を強調しており、直面する課題は日本とさほど変わらないことを実感した。

今回のツアーで視察した新聞社、新聞印刷工場には、それぞれ見るべきところがちりばめられていたが、実は最も印象的だったのは

ウィーンの印刷会社「Herold Druck」。なんといっても、鉄道の貨車によって運ばれてきた巻取紙が、半屋外に山積みになっていたことだった。暑いときもあれば、寒いときもある。壁がないため、横殴りの雨に見舞われると、大変なことになりそう。温度、湿度管理に神経を使う日本と違い、なんとおおらかなことか。世界遺産の中でも平気でタバコをくゆらしている、あの感覚と共通しているのだろうか。

タイトなスケジュールでのツアーではあったが、早朝のウィーン駅から吐き出されるサラリーマンの手に新聞が目立ったことや、ミラノの新聞スタンドの賑わいを見ることができた。即売中心のヨーロッパの新聞が、どう生き残ろうとしているのか、垣間見ることができたのは収穫だった。

「クワイエットルーム」や良し

㈱日経首都圏印刷
執行役員業務統括部長

正津 有一郎

IFRA展や視察がぎっしりと詰まった、とてもハードなスケジュールであった。

〔IFRA展〕

紙面制作と同時にWebやタブレット端末用コンテンツも自動的に編集できるというマルチチャンネル対応の編集システムのデモが



輪転操作や色調管理は静粛な部屋で

目についた。

〔上流部門視察〕

発行部数減少に対して、Webなどのクロスメディアへの対応を増収策の一つとしているそうだ。

〔印刷工場視察〕

3社を視察したが、自動化に関しては日本の方が進んでいるように感じた。

輪転機はタワー機を採用している工場もあったが、サテライト機2段重ねで両面カラー印刷を行っていた工場も多かった。ヘロルド・ドラック社のうち1セットは、日本では見たことのない6頁幅の輪転機を設置していた。

また、バルーンフォーマーを設置した工場こそなかったものの、欧州らしくコレクトラン機能やフォーマー板の3枚設置など数々のセクション版対応の設備が見られた。

輪転機の操作は「クワイエットルーム」にあるコンソールから行っていた。カットオフコントロール装置やクロズドループの色調管理装置をなどの自動調整装置を設置、折機はジョウフォルダーを使用した結果、細かな調整なしでの印刷を可能としている。自動化状況にもよるだろうが、クワイエットルームでの操作は、日本でも印刷環境が非常に良くなると感じた。

巻取紙は、端面にもワンプを付けたまま搬入。大部屋の倉庫(紙庫)にそのまま縦積みで保管している。立体紙庫や傾斜紙庫しか見たことのない私はビックリの風景だった。

給紙搬送では、開梱や仕立はほとんど手作業で行っていた。一部の工場ではアームに装着してからワンプを剥がし、一文字に手仕立てを行っていた。全般的に、必要なところだけに金をかけるというメリハリの効いた設備投資を行っているように感じた。

〔観光〕

ウィーンは三十年振りの訪問、前回の記憶は喫茶店でメランジェ(ミルクコーヒー)を飲みながらザッハトルテ(チョコレートケー

キ)を食べたことくらいしかなかった。帰ってから写真を見て「ありゃ、前回も同じシュテファン寺院に行っている。」とビックリもした。今回のツアーで唯一、中に入って見学したシェーンブルン宮殿では裏庭に花が咲き乱れ壮観であった。イタリアは初めてだったが、ミラノのドゥオーモで1時間の自由時間がとれたため内部をざっと見てから、駆け足でスフォルツァ城やダ・ヴィンチの「最後の晩餐」があるサンタ・マリア・デレ・グラツィエ教会に行った。外観だけの見学ではあったが、久しぶりの欧州を満喫することができた。

末筆ですがご同行の皆様には大変お世話になり、ありがとうございました。

早食いの東洋人にビックリ!?

(株)日経東京製作センター
東雲工場次長兼印刷部長

齊藤 哲夫

CONPT-TOUR行きを言い渡されたのは、7月末の事である。パスポートが失効して既に5年。海外渡航と言っても飛行時間が4時間未満の極東アジアの一部地域しかない。語学力は高校時代に取られた英語教師ぐるみのインチキ「英検4級」だ。増して、「青い目」の白人に「独語」「伊語」で捲くし立てられたら堪らない。「老け顔」である事は十分に自覚しながらも、顎鬚を伸ばしたのも「悪相」を生かすのが自衛手段だとの思い。

12時間のフライトは非常に辛かった。平面上の「世界地図」のイメージで、日本列島を横断(関西・九州)、中国・インドを経て、中東から欧州入りとの思い込み。丸い「地球」が頭に無い。ヒマラヤ山脈、中東砂漠に「不時着」などと要らぬ心配をする。機中に持ち込んだ「浅田次郎」のプリズン・ホテル4部作も既に2冊を読み終えた。機内モニターの飛行位置情報は、ロシア・シベリア地方の地名ばかりで一向に「ウィーン」の文字を映し出さない。モ

スクワのローマ字表記を発見し、一時の安堵もウィーンを指し示す「矢印」の動きの鈍さと機内の閉塞感とで発狂寸前。地球の大きさを体現させられた。

その昔、「モーツァルト」「ベートーヴェン」が暮らし、「ブラームス」が誕生した「音楽の都」ウィーン。「蜘蛛の巣」状に配置された豪壮な建築物や路面電車の車列。街中に屹立する銅像群に只々圧倒されるばかりだ。「美しく青きドナウ」川を見ることができなかった事が心残りとなる。

社報原稿1200字がミッション。「壮行会」もなかった「お気楽」な視察旅行とは言え、「IFRA・Expo」では気合を見せたと思う。セミナーでは、新聞・印刷業態の抱えている問題点が日本での状況と同じであると痛感できた。上流工程の電子媒体に対応する編集・広告システムソフトのプロモーションを英訳でレシーバーから解説を受けたが、畑違いで興味もなく「右から左」と聞き流してしまった。「木村さん」「林さん」ごめんなさい。下流工程には聞きなれぬ欧州の機械メーカーのブースが建ち並ぶ。欧州の新聞事情を反映したタブ紙のセクション対応の発送機器や準商用のブロード紙？（タブ紙の半分）のホチキス止め機能を持った折機やUV（紫外線硬化）インキの簡素なドライヤー装置など興味を引くものもあったが、実機でのデモもなくパネル展示が主で、やや肩透かしを食らった。会場を単独でうろつき「紙面見当」装置？に見入っていると突然、西洋人の大男に「プレゼン」を受け「這這の体」で退散した。周りを見渡せばツアーの同行者と逸れ、迷子になってしまったようだ。A・Bのパビリオンを行ったり来たり。疲れ果てて「一念発起」で購入して飲んだビールの味と「正津さん」を発見した時の喜びは忘れられない。

イタリアでの見学は、バス移動の連続であったが、適度な市内観光もあり苦にならなかった。ただ慌ただしく昼食を摂る「東洋人」達

に、レストランテの女主人は目を「瞠って」いたのだらうと想像する。

印刷工は「輪転機」を見ると元気が出るものだ。巨大な5:5のジョー・ホルダーや発送設備のインサーターにワインダーは圧巻であった。

最後にツアーを企画した事務局、添乗員さんや同行者の皆さんと貴重な体験ができたことに感謝致します。

日本人よ自信を持って

日本新聞協会
技術コンサルタント

三宅 順

海外へ出かけることがそんなにあるわけではないが、いろいろ考えさせられる場面に出くわした。今回はオーストリア、イタリアを大急ぎで駆け回ったが、やはりいくつか文化の違いをあらためて感じざるを得なかった。衣食住の観点から気のついたところを記してみたい。

最初は、衣について、イタリアはファッションの都ミラノでのこと、通勤時間帯に街中で見かけたほとんどの女の子がGパンをはいて職場へ向かっていた。平日の日本ではこういうことはほとんどなく、Gパンとは、基本的にワーキングウェア、家庭で着るものだと思っていたが、どうなっているのだろうかと考えずにはいられなかった。体型的にも日本人より素晴らしい、もっとファッショナブルで先鋭的、個性的であっ



てほしかった。

食の点では、われわれが経験したのはホテルの朝食や街のレストラン、居酒屋の料理に限定されるが、2か国とも野菜をほとんど見かけなかった。彼らの家庭での食事はどんなものなのだろうか、どれほどの野菜を食べているのだろうかと考えてしまった。日本人のコックがイタリアやオーストリア料理を作れば、もっと多くの食材や調味料を使って、おそらく世界最高の料理を作ることだろうと思う。彼らには日本でのオーストリア料理やイタリア料理(いずれも日本流にアレンジされていると思うが)をぜひ食してもらって感想を聞いてみたい気がする。

最後に、住について、といっても一般家庭を訪問し滞在したわけではないので、ホテル限定でのお話。ここにある写真を見ていただきたい。これはあるホテルのトイレだ。最初にこれを使おうとしたとき、どちら向きに座るべきなのか一瞬悩んだ。それは水のたまっている場所が逆のように感じたから。日本のものは通常逆のはず。意を決して日本流に座ったが、正しかったのかどうか今でも考えている。

また、なんといっても日本の最高傑作はウォシュレットであろう。メーカーは早く世界中に売りまくってほしい。そして、小の方のトイレ。空港やレストランで経験したが、こいつははっきり言って日本人には取り付け高さが高すぎる。いくら身長が、あるいは足の長さが長いからといって、あの高さはないだろうと思う。「大は小を兼ねる」という発想はないのか。もう少し下にセットしてあれば何も問題はないと思うのだが。

海外へ行くと、たいがいの日本人はまず言葉の問題で大きな壁にぶつかるわけだが、そんなことはたいしたことではない。こうしていろいろなことを比較してみると、どう考えても日本の方が優れていることが多いように思えてならないのは私だけか。

「また来たよ！」

(株) インテック
NSG 事業部メディアソリューション
センターメディアソリューション営業部長
林 克美

6回目です。

皆さんからツアーの参加回数を尋ねられて答えられなかった回数を数えてみました。個人的には、IFRAExpoは9年連続で視察しているようです。このように何回行ったか、自覚のないまま、今回も出かけました。

毎年訪れるので、IFRAExpoの会場には顔見知りがあります。展示会以外で実際の仕事で関係した人も出展していて、年に1度、互いに元気であることを確認し合っています。

「また来たよ!」、「元気か?」

という会話しかない(できない)のですが、それだけで満足な気持ちになります。

今回、富士フィルムブースで背中を叩かれて振り向くと、以前は富士フィルムのコンペジター社にいた人がいて、「今はお前と同じ日本の会社に勤めているよ。」と挨拶をされました。中心的な人物でも移籍する事はよくあることなのですが、驚きました。

また、会場風景を撮影しているIfraスタッフにも開会式の時点で、毎回チェックされます。こちらはウインクだけです。会場で毎日配られる新聞に、毎回、私たちの写真が掲載されるのは、彼のおかげなのかもしれません。

さて、今回の訪問先のミラノは2005年のツアー以来の6年ぶりになります。最終日のオプションツアーには参加せず、私は市内へ出かけました。私の計画は、美術館を経た後、6年前に第一工業の小山さんと行った、ギャラリア近くのピザ屋に行くことでした。

美術館を出て、目的のピザ屋を探したのですが、見つけれられません。当時は、夜に二人で出かけて適当に入ったピザ屋で、場所を鮮

明に覚えていません。ギャラリーを見ることのできるオープンテラス、という記憶だけです。20分くらい探して、何気なく振り向いた先に、そのお店がありました。当時の記憶のままでした。なんだか感動しました。オープンテラスには座れず、店内に入りました。イタリアの元気のよい老人という風貌のマスターが一人で入った私を不思議そうに見るので「6年前に来た」と言うと、納得した顔になり、「6年間待ってたよ」と言われ、それから食べ終わるまで、話し相手にされました。店を出るときには「また6年後に会おう。俺もそれまでは死なないよ」という言葉をいただきました。非常に楽しい時間でした。



ところで、今回のWAN-Ifraセミナーは、上流のテーマが例年より1つ少なかったのです。毎年、それを担当していた方が今回は不在でした。彼と私とは、NAAとIfraのプロジェクトであったAdsML（新聞広告標準XML）コンソーシアムで運営委員として一緒に作業をした関係もあり、親交があります。毎年、IFRAExpoで会って様々な情報をいただく、私にとっては大先生です。その彼からのメールが今春から滞るようになりました。今回の訪問でも会えなかったので、ワーフル氏に彼に伝言をお願いしました。

帰国前に彼からメールが入りました。

体調を崩して、仕事を休んでいるとのこと。「このような状態になってから健康が大切だと気付いた」という彼のメッセージは、普段の自堕落な生活を省みるのに有り余る言葉でした。やはり、私の大先生です。

私は今、彼に「また来たよ！」と会いに行きたいと思っています。

旅は道連れ

サカタインクス(株)

新聞事業部東京営業部マネージャー

望月 剛

何より ～旅は道連れ、世は情け～ をしみじみと実感したツアーでした。新聞社様・関係業者様と多方面からの参加メンバーでしたが、それはそれ。同じ業界で頑張っている24名が一体感を得るのに時間は要りませんでした。もちろん目的は、新聞制作の動向調査と視察なのですが、『枠を超えての仲間創り』の絶好の機会にもなりました。皆、研修会・視察は真剣そのもの、写真枚数は増し、メモも大增刷のオーバーフロー状態。しかし、一転してオフタイムでは、腹がよじれる程の笑いが絶えない楽しい時間を過ごせました。

お決まりのハプニングも盛り沢山でしたが、文字通り『仲間と人情』で乗り切れました。

むしろ旅の恥はかき捨てとして…

さて、2010年にアップル社の故スティーブ・ジョブズ氏が世界を変えたとした、iPhone、iPadが爆発的に普及した現在、新聞記事の読者層や読み方までも変えてしまいました。

IFRA展でも上流のトレンドは、コンテンツマネジメント(CMS)、クロスメディアシステムの展開がメインであり、読者を確保する為の、Web・スマホ・Pad等のデジタルソリューションへの対応に、拍車がかかっている様です。新たなコンテンツユーザーの獲得は、情報の有料化戦略を以てして、活路を見出す！としておりました。

製作面では日本同様、コスト削減(自動化・資材削減・環境対応)を謳う一方、印刷機器はデジタル印刷機の開発が加速。来年のDrupa 2012では更に多くの発表や動きがある様に感じました。

会場をあとに、まだ薄暗い早朝から一路ミラノへ。イタリアで政治と時事問題に影響力のある、最も有名な全国紙『La Stampa』を訪

問。いち早くデジタルコンテンツに対応させる為、全面的なシステム更新をしてしまう決断力には驚かされました。一方、刻々と変遷するニュース情報のスピードに対応する為、編集会議が頻繁化するなど、人的負荷が増しているのは何とも皮肉な事です。

その後、日刊経済紙のIL Sole24oreを訪問し、陸路往復2時間掛けヴェローナへ、その印刷を請け負うArena社を訪問と言う、体力勝負の弾丸スケジュールを乗り切りました。

ウィーンは、歴史建造物・芸術の宝庫で、今も荘厳なる時が流れる落ち着いた街。

一方ミラノは、歴史と明るい国民性の溢れる街。ファッションの街におじさん達…ちょっとした違和感…ドゥオーモ(ミラノ大聖堂)を目にして、時空を超えた圧倒的存在感に驚愕し、しばし見上げたまま、物想いに耽ってしまったひと時…

何より皆様のお陰で良い経験が出来た事に感謝致します。

情報の習得と端末の消失

第一工業(株)

搬送システム本店営業部主任

中島 悠希

国内の新聞社新工場見学会(国内研修会)へは何度も参加させていただいていましたが、今年はずいにCONPT-TOURへ参加させていただくことになりました。20代でのツアー参加は光栄でもあり、プレッシャーでもありました。

荷物等の事前準備は昨年新婚旅行で海外へ行ったばかりであったため、新たに揃えるものはあまりありませんでしたが、とにかく写真をたくさん撮っておこうとデジカメは最新機種のを購入しました。

仕事や技術的な話はもちろん(?)ですが、他には多少の観光や食べ物への期待も当然していました。ドゥオーモやシェーンブルン宮

殿等の壮大で圧倒的な建築物や風景は見応えがありました。高級別荘地というコモ湖では少し肌寒い気候でしたが、別荘の金額が軽く億はするという話を聞いてさらに涼しくなりました。ウィーン、ミラノの街並みも広く美しく、最初の注文したビールがなかなか出てこないゆったりと余裕のある人が多いのも領けます。イタリアの昼食では隣の現地の人が食べていたナンがおいしそうだったので、同じものを注文したつもりが、出てきたのはチーズのみで、これまた生ハムしか出てこなかった瀧口さんと分け合って(おいしく…)食べました。ただ一つ、ピザを食べる機会がなかったのが悔やまれました。

IFRA展や新聞社での視察ではiPadをはじめとするタブレットへの対応(デジタル化)の話が多数出ており、多少の知識を得ることが出来ました。実際IFRA展ではスマートフォンやiPadを使用しているビジネスマンを多く見かけました。私もiPod touchを持っていき、Wi-Fiでメールのチェックぐらいやろうと思っていましたが、イタリアに入っただけで紛失してしまいました。特にイタリアに入っただけからは添乗員さんが頻繁にスリや置き引きにご注意を、との忠告があり用心してはいましたが、全くの私の不注意で無くしてしまったので、イタリアを嫌いにはなれません。

タブレット対応の情報を得ましたが、私個人では端末を失うという非常に残念なことになってしまいました。ただ、帰国後iPod touchを遠隔操作でロックや情報の消去ができるということを知り、これまた有意義な情報を得ることが出来たと自分自身を納得させています。

忘れ物のiPod touchとピザを求めていつの日か再びイタリアを訪れてみたいものです。

最後に、今回のツアーではとても貴重な時間を送ることが出来、参加された皆様に感謝を申し上げます。この縁を今後も大事にさせていただきます。



ヨハンシュトラウス像
(第一工業・中島悠希氏)



シェーンブルン宮殿の裏庭
(日経首都圏印刷・正津有一郎氏)

TOUR 思い出の1コマ



全員集合＝IFRA展会場にて



朝のミラノ中央駅
(三菱重工印刷紙工機械・島村昌志氏)



ジュリエッタ
(インテック・林克美氏)



サンタ・マリア・デレ・グラツィエ教会
(日経首都圏印刷・正津有一郎氏)



ドゥオモ・アーケード
(第一工業・中島悠希氏)



トリノ市街の売店
(三菱重工印刷紙工機械・島村昌志氏)

駆け足の欧州視察に大満足!!

DIC グラフィックス(株)

新聞インキ事業部東京新聞第二営業部
東京第二担当課長

関 千秋

7月の半ば、「関は過去、コンプトツアーに参加したことはあるか?」と上司から聞かれた時、もしかして初の海外出張か?と気持ちが昂ったのを、昨日のここのように憶えている。それも、行き先はウィーン(&イタリア北部)。まさか、十数年前に新婚旅行で行った思い出の地へ、仕事で行くことになるうとは。何とも不思議な縁を感じたものである。

さて、そのコンプトツアー。出国前に、「スケジュールが非常にタイトなので、時間を意識して行動願います」と説明を受けた時から、嫌な予感が。まあ、ご本人様がお書きになれるであろうから特にコメントはしないが、ウィーンの空港で入国直前に長時間の足止め。出だしから躓いた。しかしながら私としては、ご当人と一緒にいたおかげで、なかなかできない経験をさせて頂いて感謝している(笑)。しかも、これが今視察団の結束を急激に強めたというのだから面白い。今回のツアーMVPは、間違いなくM社のS氏だろう。

さて、思い出のウィーン。いやあ、思い出するのに時間が掛かった。仕事(IFRA展と新聞印刷会社の見学)がメインなので当然かもしれないが、朝晩、短時間で市内を歩いても、なかなか思い出さない。人の記憶や思い出なんて曖昧である(私だけ!?)。ウィーン最後の晩、国立オペラ座やホテル・ザッハーのライトアップを見たとき、急激に記憶が蘇ったところでウィーンは終了、といった具合であった。しかし、展示会と会社見学は、まさに欧州の新聞製作事情を知る上で非常に役立つものであった。コスト削減への強い意識、自動化への流れ、ハイパーローカル化、クロスメディア対応等々、帰国後の帰朝報告に事欠か

ないキーワードのオンパレード。もう、時間が許す限り、見て歩き回った。英語他言葉の障害は、木村氏と林氏、それとJTBの樺山氏におんぶに抱っこ。ツアーを通じ、三人へは「感謝」以外に言葉がない。

ウィーンからミラノへは、ホテルを朝5時に出発。真っ暗な中、夜逃げのように(笑)移動した。そして、イタリアはトリノ・ミラノ・ヴェローナ。どの街も歴史に彩られた魅力的な土地であった。新聞社や印刷工場見学の合間を縫って、その歴史文化を肌で感じた。数百年、いや千年、二千年も昔のイタリア建造物に圧倒された。だが皆、ちゃんと本分をわきまえ、肝心の見学にも熱中。概要説明時での質問攻め、あちこち事細かく見ようとする見学に、先方関係者が辟易する場面もあったほど。しかし、どの会社関係者も自らの会社・仕事に自負を持ち、我々を本当に快く迎えて下さった。ウィーンも含め、見学させて頂いた関係各社の皆様には、この場をお借りし、心から御礼を申し上げたい。

最後の最後、帰国直前の空港にて、私のみパスポート認証不十分(人格、不適格!?)で、再手続きカウンターへ連行。帰国できないのかと焦ったが、周囲の皆に助けられ、何とか手続きし、機に飛び乗ることができた。

と、まあ、私の部屋でのお化け事件(誰かの画策!?)といい、何とも珍道中ではあったが、最後にこれだけは言っておきたい。「最高の仲間との最高の視察ツアーに大感謝! ミケランジェロ会、万歳!!!」

日本の力を再認識

東洋インキ(株)

新聞販売統括部販売部第一課課長

藤井 公一

IFRAセミナーの冒頭は、IFRA幹部の方からの東日本大震災に対するお見舞いの言葉から始まった。日本から9,000km離れたこの

地でも、あの震災の甚大さ、被害の大きさに驚愕していた事が伺い知れた。

IFRAセミナーでは、欧州新聞業界のトレンドとして、コストダウン、自動化と効率化、品質向上追求、新規ビジネスの模索といった内容の講演、展示会は日本での展示会の様な派手なデモンストレーションは少なく、各ブースでは皆ビールやコーヒーを飲みながら、商談や情報交換が盛んに行われていた。

視察訪問先では、我々CONPTツアーメンバーにしっかり見てもらおうと準備受け入れ態勢を整えて頂いており、どこも視察先でも歓待を受けた。CONPTメンバーも限られた時間の中で、熱心に質疑応答、予定時間をオーバーして事務局の方をハラハラさせた事もしばしば。

展示会と視察先では、部数減、広告減、マルチメディア配信など、日本の新聞業界と大きく変わらない欧州新聞業界がおかれている状況を知る事ができ、その中で、私は改めて他国に類を見ない日本の新聞発行部数、それを支える宅配というビジネスモデルの凄さを再認識した。また、視察先ではキラコンテンツやハイパーローカルといった読者ニーズにきめ細かく対応していくといったキーワードが幾つも出てきた。日本においても、勤勉な日本人の多様な読者ニーズに対応し、また品質要求のハイレベルなクライアントにも、我々日本人なら知恵と工夫を積み重ねていけば、必ず世界の新聞業界の手本になり続けられると実感出来た事が、私にとって今回のツアーで得られた貴重な経験であった。また、ツアー参加の皆様とは早朝から深夜まで共に行動し、異国の文化や価値観、街の景色や歴史に共に驚き、共に感動し、食事やお酒を共に堪能した時間を過ごした事は、忘れられないものである。

来年2012年はJANPS開催の年。WAN-IFRAの方々もJANPSの時期に併せて来日する計画を検討中とか。是非、日本の最新技術と新聞

業界の現状を見て頂き、また震災から復興した日本の底力を見て頂きたいものである。

最後に、実質滞在日数5日間の中でこれだけ充実した視察を行えたのも、IFRA会場でのCONPT向け特別セミナーや各ブースでの案内、またそれぞれ特徴や強みを持った各視察会社の選定から手配や段取りなど、ツアー実施に至るまでのCONPT事務局をはじめ関係者皆様の入念な準備があったからこそだと思います。この場をお借りして改めて御礼申し上げます。また、JTB樺山さんのツアー中のきめ細やかなご対応に深謝致します。

ただいまシステム移行中

富士通㈱ 社会基盤システム本部
メディアシステム事業部

平泉 新

私の海外旅行の経験はわずか2回。学校での英語の成績は良い方だったが、日本語⇄英語の脳内変換にとっても苦労した経験から、特別なことが無ければ海外にはもう行かないだろうと常々思っていたところに今回の海外視察。出発前までは、情報収集がろくにできずに帰国して、上司から怒られる最悪のケースを想像しながら「サイゼリアでミラノ風ドリア食べて体を作って行ってから行ってきます」と冗談を言うのが精一杯だった。

IFRAEXPOは90分で10ブースを回るという強行スケジュール。概要説明がメインでありその内容はiPadやタブレット用コンテンツ作成がほとんどだった。その後、各ブースを回ったが、商談をその場で行っているような状況であり、デモを気軽に見せてくれるメーカーは稀だった。

翌日以降は新聞社視察。上流工程としてはLa Stampa社とIl Sole 24 ore社の視察を行った。

La Stampa社はマルチチャネルへのコンテンツ配信とハイパーローカルに対する意識が

強い新聞社だった。EidosMedia社製システムへの移行途中であり、ワークフローを変えらるということも検討していくとのこと。今後のマルチチャネル化を見据え、移行費用が高いEidosMedia社に決断したという話から、マルチチャネルを意識したシステムへのニーズを実際に感じるこができた。

Il Sole 24 ore社は経済コンテンツを中心にマルチチャネルを意識したコンテンツ配信に力を入れていた。こちらもEidosMedia社製システムへの移行途中の新聞社であり新聞製作以外のWebや雑誌、ニュース配信等のサブシステムの統合を検討していた。今後2年ほどでシステムをEidosMedia社製へ統合しデータも1つのリポジトリで管理すること。ここ数年が勝負だろうなと感じた。

今回視察した2社に共通するのが、『近年、ベンダーを変更した移行途中の新聞社』ということである。来年以降の2社の状態(ワークフローや収益構造の変化など)について継続して注目していきたい。

また、余談だが、視察を通じて「高速のサービスエリアではちゃんと出口を確認しないと、うっかり非常用の避難経路を開けて、店内にサイレンがけたたましく鳴ってしまう」点や「木村さんの通訳を録音する為のインフラを整備して参加しないと帰国後のまとめが大変」ということを学んだ。

最後に様々な知識を持つ先輩方と過ごすことができ、本当に実のある1週間となりました。これからもご指導ご鞭撻の程よろしくお願いたします。

団長を拝命 我ら完走せり

富士フイルムグラフィックシステムズ(株)
新聞営業部部長

松浦 国治郎

昨年のCONPT TOURのハードさ、タイトさを耳にし、今年は1日伸びたので、多少余

裕があるのかもと思ったのが大きな間違い。

伸びた1日にも充実した新聞社視察が準備されていました。

嵐のように過ぎた6泊8日について、振り返ってみます。

出発2週間ほど前のツアー説明会で、視察団長を拝命。急に緊張を余儀なくされましたが、よく聞くと、CONPT側参加者で単純に最年長との由。すっかり安心して、技術的にも語学的にも明るくない事を理由に、昼間の視察は、専ら徳永マネージャーや木村コーディネーターにお任せする事にし、主に夜のコーディネートを下流側参加者の面々にご協力頂きながら専念した次第です。

今年のCONPT TOURは、前半ウィーンでのIFRA展見学をスタートに、後半はミラノを中心とした北イタリアの新聞社、印刷工場の視察でした。

IFRA会場では、CEOのリース氏他IFRA幹部によるセミナーを開催頂き、行き届いた配慮に感動。

午後は展示会場視察。上流系については、なじみのある会社名はAdobeぐらいで、後は初めて聞く社名ばかり。やはり、日本語の組版は独特の進化なのでしょう。どのベンダーもCMS(コンテンツ・マネジメント・システム)、WEB、タブレットへの展開をアピールしていましたが、課金方法についての悩みは、日本と同様の印象でした。

それに対して、下流系はなじみのあるメーカーが多く、世界共通を感じました。日本からも東京機械、東レ、富士フイルムなどが出展。富士フイルムブースでは、日本からの昔馴染みの出向メンバー4人と再会。皆元気に、東京から九州に出張する感覚で、ヨーロッパ、中近東、アフリカを飛び回っている様子。今回のCONPT TOUR体験と併せて、自分の中で、世界が少し小さくなり、身近になりました。

ウィーンの街を歩いていて戸惑ったのがトイレ。スターバックスでトイレに入ろうとす

ると、扉がテンキーボタンでロックされている。店の人に聞くと、レシートを指さされ、そこにパスワードが書いてあった！

そして、アサガオの高さは、背伸びをしたいほど高い。

いよいよ後半戦に突入、ミラノ空港到着後、そのままバスに2時間ゆられてトリノの新聞社La STAMPAへ視察。

翌日は、午前中にミラノ市内のILSole24社への上流見学、午後は2時間バスに乗り、ヴェローナへ向かい、Arena社印刷工場での見学をさせて頂く。この工場では、最近刷版をA社からFFの新製品(日本とは違い、サーマルではなく簡易タイプのフォトポリタイプ)に切り替えつつあると工場長の説明。思わずサンキュー！

今回のツアーは、①本来の展示会や新聞社の視察、②その合間での観光、③食と飲みでのコミュニケーション、の三つが見事に組み合わせられていました。

言うなれば、知力体力気力のトライアスロンです。

全員が無事元気に完走でき、この経験を共有できた事が大きな財産となりました。

この充実したコースを笑顔で乗り切った皆様、本当にご苦労様でした(^0^)/

密度の濃い、充実した有意義なものになり、心から感謝しています。

再開の会の名前はミケランジェロの会となりました。また、メンバーの皆さまとの再会を楽しみにしております。

読者離れの理由を見た

富士薬品工業(株)
営業第三部部長

瀧口 英司

今回のCONPT TOURに参加して、まずツアーメンバーの皆様に視察中の御厚恩について御礼を申し上げます。また、天候に恵まれ

暖かく雨にも降られず無事ツアーを終えられたことをEUの空とWAN IFRAに感謝いたします。

ツアーは機中12時間に及ぶフライトから始まり、ウィーンに到着したときにはかなりゲンナリしていました。しかし、地に足が着くと同時に復活してオーストリアの空気を思い切り吸い込み煙草に火をつけたものです。

IFRA EXPOは半日見学では周り切れませんでしたでしたがセミナーの解説で一部に触れることが出来ました。全般を通じて林副団長と通訳の木村様様に感謝！です。またWAN IFRAではJAPAN STADY TOURを企画しており、日本の新聞システムの優秀さが評価されていると有りがたく感じました。

新聞社及び印刷工場視察は初見のものも多く、6×2輪転機、自動版替機、UVドライヤーを興味深く拝見し、サテライト機が主流の印刷に日本との差異を観ました。

イタリアでは郵便での宅配で朝刊着が昼過ぎもあることに、読者が離れてゆく理由の一端を垣間見ました。

観光では戦火を受けていないウィーンのシェーンブルン宮殿、ミラノのドゥオモ大聖堂の歴史の長さ、古さに圧倒されカメラを向けるのを忘れるところでした。

ウィーンはワイン・Beerの種類が多く美味しい幸せな街でしたが、何しろ料理の量が多い。シュトゥルム(ワインの手前の発泡酒)はりんご酒のようでこれはこれで美味しい。ミラノ風カツレツは大きいという表現がピッタリで1人前がパーティサイズのように完食はつらかった。これはツアー中3回食して最後のイタリアのレストランでは頼み込んで小さくしてもらったほどでした。印象が強くてツアー名が「ミラノ風カツレツ会」になるのではと危惧しましたが、イタリアで宿泊のホテル名から「ミケランジェロ会」となり綺麗に収まり何よりです。

改めてツアーでの8日間濃い時間を一緒に

過ごした「ミケランジェロ会」の皆様、今後もお付き合いをよろしくお願い申し上げます。

欧州視察波高し

三菱重工印刷紙工機械(株)

営業本部営業統括部

新聞輪転機営業グループ九州担当課長

島村 昌志

「ご迷惑をお掛けし申し訳ありません」に尽きる今回のツアーを振り返ると、皆様の笑顔と欧州の新聞事情が思い出される。「有難うございます」CONPT参加決定の社内通知を受けたが、商印から新聞の世界に入り、経験1年未満の未熟な自分で大丈夫か？嬉さより不安で一杯になった。9月の初顔合わせ。気負いすぎて会場には一番乗り、二番目はミラノ行方不明事件、かちまい印刷の山元さん。和む間もなく続々と見知らぬ方が入場されてくる。緊張の中で名刺交換。席上、満足な自己紹介もできず営業失格の自己採点。

そして、あっという間にツアー当日。不安一杯のスタート。早速ウィーンの街に立つ前に試練が待ち構えていた。数百人が通過する税関で抜き打ち手荷物チェックに捕まる。DICの関さんらは無事パス。私のみアウト。欧州は煙草が高いとの風評で余計に購入していたのが仇に。他にも疑われ、缶詰まで丹念に取り調べ。フィッシュは良いが、ミートは駄目らしい。カニ缶は絵があり判ったが、ツナ缶は理解できない。最後まで不思議そうに見つめていた。(欲しかったのか?)罰金、煙草現物放棄はもとより、長時間皆様を待たせ、いきなり迷惑を掛けるトリプルショック。税関手続き終了後の皆様の冷たい視線を覚悟して集合場所に向かった。しかし、意外にも「大丈夫?」「事前に言ってくれたら協力できたのに」という救いの言葉と笑顔。このメンバーとなら実り多きツアーになる!と確信した瞬間でもあった。この気持ちが強すぎ、下流メインの視察時には質問を重ねスケジュール

を押してしまう展開度々。本当に「ご迷惑をお掛けし申し訳ありません。」

欧州視察のポリシーは、全く違う海外の世界で見聞き出来るものは全て喰らいつくことと心に決めていた。現地の新聞は新鮮だった。多彩なサイズと独特な紙面、セクションやインサートを多用した分厚く重量ある存在感。惜しみなくカラーを使い、広告ボリュームも多い。「読む方はどうだろう?」素朴な疑問を持ち早朝から街に繰り出した。疲れを知らない多彩なメンバーと日々歩いた。中でも朝日新聞社・唐澤氏とは初日から最後まで共に探索。ウィーン・ミラノ共にターミナル駅にも関わらず販売所は何と一箇所。改札が無くホームに立入って探してもフリーペーパー置き場 数箇所のみ。嬉しかったのは、ウィーン西駅で日本の新聞3紙が置かれていた事。価格€3.8。現地新聞の2~4倍の価格。移動に利用した地下鉄車内は、携帯端末使用は少なく紙媒体(新聞・書籍)に目を通す人の方が多かった。

「夜の街はどうだろう?」これは一番?の楽しみ。連日皆様と街に繰り出し豪飲。カジノもあり、ナイトクラブもあった。カジノはパスポート忘れ、ナイトクラブは料金にご用心!全体を通して食べ物は比較的安く美味しかったが、どれも量が多い。やはり良き思い出は食事より、食事を共にしたメンバーの笑顔。皆明るく冗談好きで、短期間でこんなにも打ち解けるなんて。これこそが最大の財産。今後進化する「ミケランジェロ会」が楽しみ。



新局長に就任して

印刷機の可能性を探る

静岡新聞社 印刷局長

増田 晴樹

樹脂版凸輪の上にハー
フデッキのサテライト型
オフ輪(ジェミニ)を載せ
た24頁2ヶ面カラーのハ
イブリッド輪転機が4セ
ット。1面には、ニュー
スカラー写真が1枚。対
向面の終面は、全面広告が入り、7版ある営
業地域ごとにカラー広告を切替える。発行部
数51万部は、僅か4ゲートのヤードから神業
的に仕分けられて発送されて行く。私の入社
した1977年は、こんな光景で新聞が作られて
いました。時代の技術を限られた設備の中で、
自分達の理想とする印刷に近づけようと真摯
にどこまでも追求する姿勢、言うなれば「シ
ズオカイズム」と言ったものが、深く局員の
魂に根付いていった時代ではなかったかと思
います。この魂は、今も受け継がれ、これか
らも受け継いでいかなばならない、かけがえ
のない社風と思っています。



印刷局一筋に、あれから34年。その間、入
社翌年には、ハイブリッド輪転機は、順次オ
ールオフのB-B機、カラー機(サテライト)に
置き換わり、本格的なオフ輪時代に突入する。

90年秋に東京機械製作所からタワー型輪転
機の共同開発の申し入れがあり開発に着手。
92年3月28日付静岡放送開局40周年特集号両
面カラー8頁がタワープレスによる両面カラ
ー印刷の第1号となった。93年に新聞協会賞
などを受賞した栄えあるタワープレスの1号
機は、94年6月に信濃毎日新聞社塩尻工場に
納入され、以後現在に至るタワー型機の全盛

期を迎えることになる。

新しい新聞制作拠点となる制作センター立
ち上げ(97年秋)に際し、タワー型輪転機の導
入は勿論のことであるが、下流工程全体をコ
ンピュータ管理することになった。いわゆる
工程管理システムの導入である。肝心の開発
ベンダーは、当時経験豊富な日立製作所では
なく富士通に決定。95年の春から開発に着手。
下流工程を製版、印刷、発送などの6工程に
分けて開発。中核となる印刷工程の開発とと
もに全体の統括を担当した。我々も富士通も
手探りで開発を進め、97年9月の制作セン
ター本稼動にこぎ着けた。しかし、今思えば、
餅は餅屋。富士通は、製版、発送工程まで開
発を担当したが、生産設備の複雑な動きやタ
イミング、条件までを完全に把握するのには
苦戦したようだった。

* * *

工程管理システムの運用が軌道に乗ると発
送業務に携わる。東海地震対策の中で輸送部
門の対策は置き去りになっていた。社に対策
案を提示し災害対策輸送本部を立ち上げて頂
いた。輸送のための通信手段の確保から陸路、
海路、空路に及ぶ輸送手段の可能性を模索し
た。当時これが開通すれば何とかなると将来
の完成を待ちわびていた第2東名が、来年初
夏には県内御殿場・三ヶ日区間のみ部分開通
する。県内東西150キロメートルを結ぶ災害
時の輸送手段によりやく目処が立ちそうだ。

制作センターが立ち上がってから早いもの
でこの秋で14年が経過した。輪転機メーカ
からは、導入後20年での更新を勧められてい
るが、社内外の厳しい環境がそれを許してはく
れない。2022年までの今後10年余り、導入後
25年間輪転機と周辺設備機器を維持するため
の計画を現在作成中である。これまで、機械
的な整備や電氣的な保守について、出来るだ
けメーカーに頼らない自前工事を数多くこな
し、それなりのノウハウを積み上げてきた。

今回の計画もこれまでの経験を最大限に生かしつつ、メーカーの協力も得ながら無理なく無駄のない計画としたいと考えている。

08年のDRUPAでデジタル印刷機が大きく取り上げられてから3年が経過した。デジタル印刷機を採用してのビジネス展開は、なかなか進まないが、デジタル印刷機の技術そのものは、少しずつ着実に進歩しており、新聞

印刷に対する課題も明確になって来ている。デジタル印刷機の特性を特に地方紙としての新聞印刷に取り入れることができるのか。その意味で、現在の輪転機の延命目標である今後10年間の技術的な発展が非常に楽しみであるし、新たな技術と構想による印刷機の可能性を多方面から探っていく10年になると考えている。

「TKSかずさテクノセンター」視察記

(有)メディアテクノス 代表取締役 井上秋男(JAGAT客員研究員)

1.はじめに

株式会社東京機械製作所(以下、東京機械製作所)は、新たな生産拠点「TKSかずさテクノセンター」が7月から本稼働に入ったことから、10月25日、26日の両日、得意先はじめ関係者ら約400人を招き完成披露祝賀会を開催した。また、生産効率向上と省エネをコンセプトに建設された新工場見学と最新主力製品の公開運転も行った。視察記として披露祝賀会、かずさテクノセンターと公開運転の概要を紹介したい。

2.完成披露祝賀会

冒頭、あいさつに立った芝則之代表取締役社長は、かずさテクノセンターの建設経緯の紹介と公開運転する「新聞デジタル印刷機 JETLEADER 1500」「世界初のLED-UV印刷

システム搭載新聞オフセット輪転機」「インド向けの4×1新聞オフセット輪転機」について説明した。また、「当社は極めて厳しい経営環境下にあるが、その中で、我々がやらなければならないことは、お客様のご要望に従って新しい技術による新しい製品を開発していくことである」と今後も新製品開発に向けての抱負を述べた。

新工場披露後、近くのオークラアカデミアパークホテルで祝賀会が開かれ、芝康平代表取締役会長は「幸いにも研究陣も揃っており、じっくり研究するには最適の環境である。今日はJETLEADERを中心にご覧いただいたが、従来から製作している新聞・商業輪転機についても、いままでどおり力を入れて新製品を考えている。新しい環境の下で製品づくり、研究開発に全力を挙げて努力していきたい」とあいさつした。

3.かずさテクノセンターの概要

■背景、経緯

東京機械製作所は、1874年(明治7年)に創業し、1906年(明治39年)には国内メーカーとして初の輪転機を完成させた。1937年(昭和12年)に玉川工場(1961年に玉川製造所に名称変更)を建設した。以来、74年にわたり主力工場として、凸版輪転機からオフセット輪転機、最新のシャフトレス輪転機、デジタル印



新聞デジタル印刷機の実演



LED-UV印刷システム搭載オフ輪の実演

刷機など様々な新聞・商業用輪転機や周辺機器・発送機器を開発・生産し、世界的にも高い評価を得た。2005年3月から川崎市の地域再開発が始まり、工場が対象地域となったことで2006年から移転先を検討した。その結果、千葉県からの誘致もあり2007年3月に千葉県との間で協定を締結して「かずさアカデミアパーク」に移転することを決定、2009年11月から建設工事を開始した。今年3月に無事工事が完了し、4月から設備機械や人員の移動を始め、7月から本稼働に入った。なお、玉川製造所跡地は、大型複合施設と高層住宅の建設が予定されている。

■2拠点の研究・生産体制の確立

同社ではおもに国内外向けの新聞用および商業用輪転印刷機と大型インキジェット印刷機を製作している。西の拠点「伊賀テクノセンター（三重県）」と東の拠点である「かずさテクノセンター」と合わせ東西2拠点で最先端の研究開発・生産体制を確立した。

■建設コンセプト

「生産効率向上」と「省エネ」の2点を重視して設計・施工した。生産ラインは、材料投入から加工、組立、発送までの工程がスムーズに流れるようにレイアウトを行った。製作品は非常に高い加工精度を必要とするため、大型機械含め100台近くある加工エリアは、室内を一定温度に保つ無窓工場とし、外気の影響を極力抑えて加工精度を向上して、より良い製品を提供出来るように配慮した。デジタ

ル印刷機の組立ラインは防塵対策が必要なため、工場内に専用の部屋を設け生産している。「省エネ」は、空調などを含めエネルギーの使用量を細かく管理できるように中央監視システムを導入。さらに30%省エネの空調システムや工場照明についても明るさや寿命のすぐれたものを使用している。

■全体レイアウト

総敷地面積は道路を挟み2地区に分かれており約10万4369.48㎡(約3万2千坪)で、玉川製造所の約3倍規模となっている。工場エリアは約2万坪で「研究、機械加工・組立棟」が配置され、建屋は鉄骨2階建て延床面積は2万865.58㎡(約6300坪)。もう一方のエリアは、現在、駐車場として利用している。それぞれ将来を見据え、拡張エリアを持たせている。また、条例により敷地内の35%は緑化スペースで緑豊かな工場となっている。



TKSかずさテクノセンター外観

■工場構成

①工場棟はセンター内で最も広いスペースを占め、機械加工工場、組立工場、付属棟、研究棟で構成されている。「機械加工工場」は、輪転機の主要機構となるフレームを製造するフレームライン、胴を加工するシリンダーライン、より細かい部品加工を行うギア・ローラーラインが備えられ、各ラインは最新のNC工作機械が導入されている。「組立工場」は、塗装場、荷捌・配膳エリア、ユニット組立エリア、製品倉庫から構成。②付属棟は加工や組立を様々な角度から支援する三次元測

定機、修理室、コンプレッサー室、設備機械室、次期製品開発室、トレーニングスクール研修室で構成。③研究棟は心臓部であるデザイン部、新たな時代の製品づくりのための研究開発に携わるR&Dセンター、事務部門も入居している。

4.新印刷システム公開運転

①高速・高品質新聞デジタル印刷機

実演された「JETLEADER 1500」は、両面4色刷り可能なインクジェットデジタル印刷機で、給紙部、印刷部、紙面監視部、折部、セクション集積部、チョッパー部により構成。印刷速度は最高150m/分(来年200m/分予定)、解像度は600×600dpi、印刷幅は最大541mm。水性顔料インクを使用し、給紙方法はウェブ巻出し式。排紙形式は新聞折りで、32ページの新聞を両面フルカラーで1時間1360部印刷可能。

公開運転後に研究発表会も行われ、少部数・多媒体へのニーズやビジネス展開として販売店単位の地域情報の印刷(チラシ、パンフレット、DM)や新聞社間の協業体制とインク、紙、ランニングコストの全体最適化への取り組みを紹介した。

②世界初のLED-UV搭載新聞オフセット輪転機

インド向けに製作した4×1(4ページ幅、1ページ周長)タワー型オフセット輪転機「カラートップ5000UDI」同等機に新開発のLED-

UV乾燥装置を搭載し、毎時10万部で実印刷を行いサンプルを見学者に配布。LED-UV乾燥装置は既に枚葉オフセット印刷機に搭載され普及段階に入っているが、新聞オフセット輪転機では世界初。従来のランプを使用した乾燥装置と比べ、LEDを採用することでオゾンの発生もなくなり、排気ダクト不要と消費電力の大幅削減、小さい発熱による印刷資材や輪転機への熱影響の抑制、長寿命LED光源の使用などの特長を持ち、短納期、準商業印刷やコスト削減も可能となることで、新聞印刷の高付加価値化が期待されている。

③インド向け4×1新聞オフセット輪転機

4×1オフセット輪転機「カラートップ5000UDI」はインド南部ケララ州にあるマトゥルプミ社に納入される。1号機はケララ州の州都、トリバンドラムの新工場で9月初旬から稼働開始、2号機はケララ州最大の港湾都市コーチンに、3号機はマトゥルプミ社の本社のあるカリカットに今年末から来年にかけて出荷予定。「カラートップ5000UDI」は、版胴・ブランケット胴ともに1倍胴の4×1方式のオフセット輪転機で、マトゥルプミ社への納入機は24ページフルカラー、最大印刷速度は15万部。軽量コンパクトな印刷ユニットにより消費電力削減、ブランケット版や刷版などの印刷資材節減、高精度の印刷品質、刷り出し損紙の削減などの特長を持っている。

IGAS2011 見学記

グラフィックアーツテクニカルコンサルタント 尾崎章

IGAS 2011国際印刷機材展概要

9月16～21日の6日間、東京・有明の東京ビックサイトで開催されたIGAS展は入場者数73,544名、出展社数327社を数えた。2007年開催の前回との比較では入場者数56%(前回130,165名)、出展社数59%(前回550社)と世界4大展示会としての存在を問われる内容と

なり今後のIGAS運営に課題を残した。

1.デジタル印刷機の展開

DRUPA 2008から本格化したデジタルプレス展開は新聞製作面でも小部数新聞発行、ハイパーローカル展開で注目されるテーマである。IGAS展では、メーカー各社が短納期・



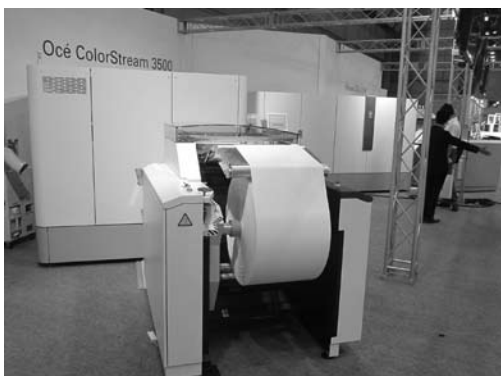
IGAS会場入口

小ロット・バリエブルの特徴を事例紹介によって具体的にアピールする傾向が目立った。

例えば、富士フイルムは仮想カフェを設け同店から創生される印刷需要に向けた対応を紹介、キャノンでは需要拡大化のフォトブック向け対応を説明する等、具体例に沿った製品紹介例が多く見られた。

製品面では、電子写真方式(トナー方式)に新製品は無く、①ライトプロダクション、ミドルプロダクション、フォトブック等、用途に応じた製品の細分化、②インライン後処理工程向け関連機器の充実、そして③オフセット印刷に匹敵する印刷品質追求に向け機能拡大・改良が施された製品が出揃った。

メーカー別では、①コダックが写真プリント品質を可能とするNex press SX/Photoを国内初出展、②液体トナーを唯一採用、オフセット印刷に近い品質再現を行うヒュレット・パッカードはハイエンドモデル



キャノンによるOce color stream紹介

Indigo7500からエントリーモデルのIndigo3550までのラインナップを展示、③コミカミノルタは、Binzhub Press C8000等のラインナップ機種を出展、低温定着方式による自然光沢と環境緩和性を紹介、④リコーは、納入実績3000台以上のオイルレストナーモデルPro C910SC751EX等のプロシリーズ製品展示を行った。

一方、海外で小部数新聞製作用としての導入も増加しているインキジェット方式のデジタル印刷機は、①商業印刷向けコート紙対応の富士フイルム・Jet Press 720, 大日本スクリーン・True Press Jet SX, コダック・Prosper1000 Press が出展を行い、②上質紙・新聞用紙・情報紙対応機としては、ミヤコシがMJP20E, MJP20Hの2機種を、キャノンはOce Color Stream 3500Lの初出展を行った。更に大日本スクリーンはTrue Press Jet 520EX, ヒュレット・パッカードもT350/T400 Ink Jet Web Pressを出展、東京機械はTKS Jet Leader 1500をパネル紹介、富士ゼロックスは2800 Ink Jet Color Systemの初展示を行いインキジェット市場への参入を開始した。新聞向けは、キャノンがオセ機による海外新聞見本を展示、東京機械がビデオ紹介を実施した。

DRUPA以来、フジJet Press 720の製品化に向けた商印各社の期待度は高く同社ブースは会期中活況を呈した。またミヤコシは、自社ブランド製品の国内外販売及びオセ社へのOEM供給でビジネスを拡大しているが、今夏よりキャノンによるオセ製品の国内販売開始に加えて富士ゼロックス向け製品の供給を開始した事により当該市場に於ける存在感を高めている。

2.枚葉印刷機の省電力、高生産性対応

今回のIGASは「UV・IGAS」と称される程に枚葉オフセット印刷機及び大判インキジェットプリンターにUV乾燥システム搭載した



リョービLED・UV紹介

製品の紹介が積極的に行われた。

枚葉オフセット印刷機への省電力型UVシステム搭載は、リョービと小森コーポレーションが先行、前者はパナソニック電工が印刷用に製品化したLED・UVランプユニットを搭載、リョービに続いて三菱印刷紙工機械も当該分野に参入を行っている。小森コーポレーションは、オゾン発生が少ない高出力型のUVランプを使用した乾燥システムをハイブリッドUVの名称で商品化している。IGAS展では、リョービがLED・UV装置及び反転装置搭載8色機による両面即乾印刷を実演、小森コーポレーションは、オフセットオンデマンドと称しデジタル印刷機に対抗するフレキシビリティの紹介を行っている。

更にアキヤマインターナショナルがLED・UV搭載新製品をパネル紹介、プリンター向けも含めたLED・UV装置単体としては、パナソニック電工、アイグラフィックスに続きウシオ電機、ボールドウィン、ヘレウス、HOYAが新規参入を行っている。

印刷機大手のハイデルベルグは当該市場への参入を見送っていたが、今回LE・UVの名称でLow Energy型UVランプを搭載した8色機の展示・実演を行っている。また、省電力型UVシステム普及により増加する専用インキ需要にインキ各社も技術面・コスト対応力を高め、新聞UVインキへの波及効果も期待

できる。更に、10月には東京機械が新工場「かずさテクノセンター」披露会でColor Top 5000UDI+LED・UV乾燥システムの実演を行っており、新聞LED・UVは新しい局面を迎えている。

3.完成度が高まったプリプレス展開

プリプレス工程のデジタル展開は完成度の高い領域に達したと判断できる状況にある。

ワークフロー展開は、富士フイルム、大日本スクリーン、コダック、アグファ等の各社がデジタル印刷ワークフローを加えた統合管理型ワークフロー提案に軸足をシフトしている。特に印刷用紙の効率使用に向けた大貼り面付・ギャング機能各社がサポートした事が特記される。また、大日本スクリーンはインキジェットプリンターとCTPシステムを統合するユニバーサルワークフローを紹介、IFRA EXPO展でPPI社等が提案する統合ワークフローと同一潮流になっている。

プリプレスの中心的テーマで有ったサーマルCTPは、ほぼ完成の域に達し唯一の話題が富士フイルムの無処理版・XZ-Rであった。

フジXZ-Rは、既存製品ET-SHにUVインキ適性の付加、焼出画像の視認性向上及び印刷適性の更なる向上を図っている。

当該製品は、静岡新聞グループの伊豆新聞が2007年夏より採用しており今回の改良により作業性は更に向上すると思われる。

新聞界での実績が有るアグファ・アズーラ、同一ガム処理型ケミカルフリーのコニカミノルタ・ブルーアース及びハイデルベルグ・サフィラも納入実績の順調拡大と環境緩和性をアピールした。

以上、IGAS展から新聞製作に関わる部分の概要を紹介したが、各社が事例紹介等を主体とした実務型展示を行った事より有益情報が多く発信されたと実感できる内容で有った。

樂事万歳

ぶらり「乗り鉄」の旅

(株)ニコン

映像カンパニーマーケティング本部
第三マーケティング部 CS 課

伊東 浩

最近、私は子供のころの趣味に回帰している。その趣味は「鉄道にのること」いわゆる「乗り鉄」の趣味である。今までは忙しさのあまり、時間が取れずに、好きな趣味がおろそかになっていたが、リタイア間際になり、少しでも時間が出来てきたのを幸いに、楽しむ機会が増えた。仕事で欧州に出張した際にも、現地職員のピックアップを断って、電車やトラムを使って、オフィスに行ったものである。プライベートでの欧州観光の際には、必ず列車の旅を入れている。2007年にはTGV、氷河特急に、2010年にはチザルピーノに乗っている。

* * *

そして、今年の夏、電力事情の関係で長い夏休みが与えられた。私にとっては「渡りに船」である。さっそく、「青春18切符」を買って、5日間のローカル線乗りまわりの旅に立ったのである。一層東北へ、も考えたがローカル線の復旧がまだまだであったため、影響の少ない西日本方面にした。さて初日、地元の駅を朝4時30分に出発。真夏とはいえ、まだほの暗い中、各駅停車に乗車。中央・大糸線経由で、北陸地方にたどり着き、砺波平野や雨晴海岸線を走るローカル線に乗車。長閑な情景とレトロな駅舎、列車との出会いが、子供の頃の感動を蘇えらせた。夜8時福井の街にて、赤ちょうちんで一杯。この瞬間子供の感動からオヤジに戻った瞬間である。

さて、翌日は恐竜の街福井散策。えちぜん

電車で勝山を経て九頭竜川を渡し、大野へ抜ける。派手な塗装の九頭竜湖線にのり、再び北陸本線に戻る。この日は「日本列島の一番太いところを横断する。」というテーマで紀伊半島までの旅。在来線最長の北陸トンネルを抜け、琵琶湖を見ながら南下。途中、京都・奈良も観光せずにひたすら各駅停車を乗り継ぐのは、乗り鉄ならではの旅である。

3日目は紀伊半島一周、4日目は飯田線秘境の旅の後、温泉で旅の垢を落として、無事帰京した。5日間、ひたすら各駅停車に乗り、総走行距離は約2000km。結果的には電力不足が私に大いなる恩恵をもたらしたのである。

* * *

最近はJRも効率主義で赤字ローカル線はどんどん廃止される。まあそれ自体は今後永くJRが生き残っていくために重要なのは重々承知している。しかしながら感情面では寂しさひとしおである。

日本では旅行というと、短い日程に山ほどの有名観光地を詰め込んで、それを効率よく回る、いわゆるパッケージツアーが主流である。確かにパッケージツアーは、コストパフォーマンスは高いし、旅のスタイルも人それぞれとは思ふ。私には思い出や感動量では、こうした「手作り旅行」が勝るように思える。あと数年で現役を引退する身としては、第二の人生を楽しく過ごすために、安価で、思い出深い旅のプロデューサーを目指そうと思っている。



スイス・イタリアを結んだ「チザルピーノ」

高品質の製品を、魅力的な商品としてお届けすること。 それが私たちの考えるソリューションです。

印刷用ゴムロールの製造を開始したのが半世紀前のこと。以来、明和が心掛けてきたのは、まずお客様のニーズから発想するというマーケット・インのものづくりです。

日々の営業活動やお客様とのコミュニケーションによって得られた独自の技術・蓄積してきた経験とノウハウをもとに、さまざまな、自然環境にも配慮した製品の研究開発にも積極的に取り組み、次世代のニーズを見据えて

私たちは明和しかない、そんな製品づくりを追求しています。

さらに、製品に関する情報、技術についてのコンサルティング、最高のコンディションでご使用していただくためのアフターサービスを提供するなど、総合的ソリューションでサポートして参ります。

また、新聞業界においても、軽量化＜CFRP＞を開発し15年余を過ぎ現在の最新高速輪転機の標準ロールとして採用されるに至りました。明和ゴム工業は、新聞業界の更なる発展と様々なニーズに応える新製品開発を推進して参ります。

今後とも、変わらぬご愛顧のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。



明和ゴム工業株

「DIC 川村記念美術館」

印刷インキ事業で創業したDIC（ディーアイシー）は、今や印刷分野だけでなく、合成樹脂と有機顔料を基礎材料として、様々な分野に事業を展開しています。自動車、液晶テレビや太陽電池などの電気電子分野、建築・住設、食品分野などにも製品を提供しており、その数は約30万種になります。

DIC川村記念美術館は、このDIC株式会社がその関連グループ会社とともに収集した美術品を公開するために、1990年5月、千葉県佐倉市に設立した美術館です。

17世紀のレンブラント、19世紀のルノワールからシャガール、ピカソに至る西洋近代絵画、ニューマン、ステラなどの現代美術、さらに尾形光琳、長谷川等伯らの日本美術まで、幅広いコレクションを展示しています。



また美術館に隣接する自然林の散策路では四季折々の風景を楽しんで頂いております。

東京駅より約90分のところ、是非足をお運び下さい。

DICグラフィックスはDICグループの一員として、これからも、地球環境の保護や、安全で安心して生活出来る豊かな社会作りに寄与すべく、生活に彩りと快適を提案する企業として技術のイノベーションを追求し、新たな価値の創造にチャレンジしてまいります。

DICグラフィックスの今後にご期待下さい。



DICグラフィックス株式会社

おかげさまで 100周年

新聞各社およびベンダー各社の皆様には、長年にわたるご愛顧をいただいておりますことをこの場を借りてお礼申し上げます。

IBMは今年創立100周年を迎えました。秤を作る会社から始まり、その後、一貫して事業の中心となる考え方は、お客様のビジネスを効率化し、お客様の経営に貢献することでした。21世紀に入り、世界がフラット化され、企業間のつながりも複雑化しています。またこの100年で地球の人口は3倍に、水の使用量は6倍に膨らむなど、資源の最適分配が人類にとって重要な課題となりました。そのため、ある一企業の効率化だけではなく、地球規模で社会全体に目を向けていくことが必要との考えから、2009年に「スマータープラネット」

という企業アイデンティティーを作りました。地球上にある無駄や非効率、リスクをテクノロジーで排除し、より豊かな世界を実現するかということを、世界170カ国のIBMで共通目標として事業展開しています。この取り組みは、医療、公共、物流分野から、現在では全業種で、業務データの高度な分析による業務効率の最適化へと繋がってきました。

新聞業界も、現在の状況はチャンスにもピンチにもなりうる大きな変革期を迎えていると思います。業務の効率化による守りと、新サービスでの新たな収益源を作り出す攻めのバランスで、新聞業界がよりよい社会創造のリーダーとなるお手伝いができるよう、弊社として一層の努力をしていく所存ですので、今後ともよろしくお願いいたします。



日本アイ・ビー・エム(株)

新聞印刷輪転機の

電気配線工事メーカー

弊社は新聞印刷輪転機電気設備配線工事全般の業務に携わり、人に優しく、機械に優しく環境保全に勤める電気配線工事のエンジニアリング会社です。

弊社は昭和24年5月東京都中央区銀座5丁目10番地に東和電気工業株式会社として創立され、本年創業62年を迎えました。途中幾度かの移転を行い平成14年6月に現在の東京都中央区八丁堀1丁目7番地に移転しました。

新聞印刷輪転機の納入据付は国内全域に広がり、配線工事の工事区域を拡大され弊社としても顧客のニーズに対応すべく、昭和30年に大阪支店事業所を設立し西日本地区の受注工事に対応し、品質の安全確保を図りました。

今日の新聞印刷輪転機は地球環境を配慮した省資源、省電力化と変化しています。弊社の関わる電気関係も日々研究開発され進化される今日、新聞印刷輪転機の電気配線工事に携わる「新聞印刷輪転機配線工事メーカー」を目指す弊社としても、日進月歩の技術開発に対応し、施工業務の技術の研究開発に努め、今後の施工の効率化、エンジニアリング能力の向上を図りこれまでの経験と技術を発展させ安定された品質の製品をご提供し、その製品完成に関わる多くの皆様と共に新聞印刷の安定確保と紙面品質の向上に貢献し参加できればと思います。

最後になりますが、今まで同様皆様方のご指導、ご支援を賜りますようよろしくお願いいたします。



東和電気工業(株)

第109回技術懇談会記

CONPT-TOUR2011報告会

11月18日午後3時から、日本記者クラブ・宴会場に新聞社・協会関係24名、会員社・その他33名、計57名が参加しCONPT-TOUR報告会を開いた＝写真。今年のIFRA展は来年のDrupaをにらみ新技術、新製品の公開を控えていた傾向があったにもかかわらず、特に新聞社関係の方々を中心に大勢の聴衆が集まり盛況だった。



講師はIFRA展・同セミナーを林克美氏(インテック)、上流工程を平泉新氏(富士通)、下流を津田鉄也氏(東京機械)、全体総括を三宅順氏(協会技術コンサルタント)が務め、約2時間にわたり視察の成果を報告した。司会進行は小股文雄クラブ委員長。

報告会の後、懇親会を開き43名の出席者が思い思いの話題に意見を交わした。またツアー参加者は1カ月ぶりの再会を果たし、写真交換の場ともなった。松浦団長の中締めで午後6時半すぎお開きとした。

京都で新聞大会開く

第64回となる新聞大会が10月18日京都市内のホテルで開かれ、新聞界と関連業界から530人が参加した。秋山耿太郎協会長は挨拶の中で、東日本大震災の報道に持てる力の全てを注いだとした上、新聞経営をめぐる環境の厳しさに触れ「いい紙面を作っていくだけ

では生き残っていけない。経営基盤を安定させ財務体質を良くしていくことが必要だ。業界で協調と競争を土台に信頼醸成の雰囲気を作り上げることができるかどうかだ」などと述べた。

今年度の協会賞技術部門には産経新聞社のCMS製作システム「ASURA」が受賞し、表彰式が行われた。ASURAはコンテンツのワンソース・マルチユースを実現するもので、多媒体へ効率的な配信ができる。

協会長・副会長らをパネリストに座談会があり、大災害への制作・印刷・輸送対応が論議された。今回の震災でも災害協定を結ぶ友好社に全面的な協力がなされたが、より広域的な協力体制を作るべきとの意見から、協会ベースで体制作りを検討していくことになった。

会員消息

■退会

＊東機エレクトロニクス(株)
(10月31日付)

■担当者変更

＊NECエンジニアリング(株)
(11月10日付)

[新]佐藤 克英氏
(インターネットターミナル事業部事業推進マネージャー)

[旧]緑川 葉一氏
(インターネットターミナル事業部事業推進部 販売推進グループ主任)

＊東芝ソリューション(株)
(12月5日付)

[新]斎藤 幸治氏
(流通・金融ソリューション事業部メディアサービスソリューション営業部メディア・サービスソリューション営業第二担当主任)

[旧]小股 文雄氏
(メディアソリューション営業第二担当参与)